

# 瀋陽だより

2015年 5月号

## 高校部 春の行事 ～成人式～

報告者：東北育才学校  
高井 奈央子

先月末、東北育才学校高校部にて成人式が行われました。中国の成人年齢は18歳です。この日会場に集まったのは高校2年生だったので、もしかしたら数え年でカウントしているのかもしれませんが。

後ろのスクリーンに、生徒たちの思い出の写真が映し出された後、先生たちからのメッセージ動画が流れるなど、なんだか日本の結婚式二次会を思い起こされる構成でした。生徒たちは、「18歳、大人になったから、やってみたいこと」をテーマに自分たちのメッセージ動画も作成しており、見ていて飽きない内容でした。



保護者・教員・生徒による詩の朗読やクラスごとの合唱など、日本の成人式とは全く趣が異なる成人式でした。尤も、私は大学のスケジュールの都合上、自分の成人式には出られなかったもので、日本式成人式の具体的な内容はわからない、と生徒に言ったら、「えー」と言われてしまいました。

成人したとしても、学校の規則で「飲酒・喫煙は禁止」とされているので、卒業までは今まで通りの生活を送るというのは日本の高校と変わりません。

中国の学校には日本人からするとちょっと変わったルールがあります。それは「恋愛禁止」です。中学生や高校生に「恋愛禁止」というのは、ちょっと無理があるような気がします。しかし、この「恋愛禁止」ルールにかかわらず、年齢に関係なくみんなこっそり愛を育んでいるようです。ただし、完全に有名無実化しているかというところでもなく、異性交遊が表沙汰になると、先生から関係を解消するように言われるそうです。さらに驚いたのは、もし学生が妊娠するなどの事態が発生した場合、教員が責任を追及されるという話でした。管理・介入する権利があるから、責任も発生するということです。中国の権利と責任に関する理論は、日本よりもずっと明確で分かりやすいと感じました。

## ～体操大会～



労働節も近づくある日、高校部の生徒が、私に言いました。  
「先生、今日は体操の大会があるから、午後からの授業はありません。」  
私は聞きました。

「体操の大会って何？」

生徒はどう説明したらいいか分からない様子だったので、百聞は一見に如かず  
ということで見に行きました。

東北育才学校高校部は郊外にあるため、立派なスタジアム状のグラウンドを  
持っています。「体操の大会」はそこで盛大に行われていました。

クラスごとに、行進と体操(日本のラジオ体操のような感じでした)を披露し、  
優劣を競うというものでした。最近、学校の敷  
地内で行進の練習をしている光景をよく目に  
したのは、この大会があったからだったので  
す。平日にも関わらず、保護者の方々が立派な  
望遠カメラを手に、参観していらっしゃいま  
した。

大会が終わった後、生徒たちは労働節連休を  
家で楽しむため、寮の荷物をまとめて、帰宅の  
途についたのでした。



# 瀋陽日本語弁論大会

5月23日、日本人会出資・日本語教師会主催で、瀋陽日本語弁論大会が開催されました。今年は日本人会の要望で、各校代表一名（去年までは学習者数に応じて複数代表を出すことができました）になってしまったため、出場者数は18名と少な目でした。しかしその分、レベルの高い発表が多かったと思



います。東北育才学校からは、高校部1名、中学部1名の代表が出場しました。残念ながら、私が担当していた中学部の生徒は上位3位に入ることができませんでした。弱冠15歳ながら、驚くほどきれいな発音で日本語を話す生徒だったのですが、やはり高校生を相手にするのは少し厳しかったようです。とはいえ、3位以内に入らなかった場合、来年も参加する資格を得られるので、あきらめずに来年も挑戦してほしいと思います。

大会は大学の部と、高校・中学の部に分かれていたのですが、大学生だからといって必ずしも高校生より日本語が上手というわけではありませんでした。むしろ発音は高校・中学生のほうが上手です。語学教育は若いうちにやっておいたほうが良いというのは本当のことだと感じました。

今回の大会では、初めて中国式の運営事情というものを垣間見ることができました。例えば、来賓の方の肩書が「〇〇副所長」だった場合、席札は「〇〇所長」にする（「副」を付けたままにしておくのは失礼なのだそうです）などです。

開催に当たっては日系企業からも出資していただいているため、各企業に対する配慮も大変なものだったようです。1位・2位・3位に企業名を冠した賞や副賞を贈ってしまうと、その順位が企業のランクだと判断されてしまうため、上位者に副賞を贈ることは難しいというやりとりがあったそうです。去年は参加人数が多かったため、4位以下に企業賞を分配していたのですが、今年は参加人数が少なかったために、参加人数＝企業賞となってしまっていました。協議の結果、1位～3位にも企業からの副賞が贈られることになりましたが、もしかしたら、後で問題になるかもしれないという心配を引きずったまま閉会しました。

この大会は、教師会の皆さんの献身によって開催されているようなものでしたが、日本語を勉強する学生にとって良い目標、良い励みになる大会です。いろいろところで運営上の衝突があったりしましたが、是非これからも続けて行

ってほしいと思います。

大会で「理解とは、一方通行ではない」と発表した生徒がいました。「なぜ私のことを理解してくれないのか」と不満に思っているだけでは何も進展しない、分から相手のことを理解しようと努力して初めて、相手からの理解を得られるという内容でした。表現を変えると、相手のことを理解しようと努力してないのなら、「私のことを分かってくれない」などと文句を言う資格はないということだと思います。個人レベルであっても、文化という形のない単位の話であっても、これは変わらない真実だと思います。

この大会の開催自体が、お互いに相手のやり方や習慣を理解し、妥協しあった結果です。もしかしたら「教師会の酔狂」と見られてしまうこともあるのかも知れませんが、これは投資するべき事業だというのが私の見解です。

もちろん、日本語を学習する学生たちに、やりがいや目標を提供するというのが第一の目的ですが、開催に至るまで行われてきた、たくさんのやり取り自体にも価値があります。



↑表彰式

「中学生の制服＝ジャージ」という事情があるので、こういった正式な場面では、それぞれが準備した発表用の服を着ます。そのため、まだ中学生とはいえ、スーツを持っている、という生徒も結構います。